

食品安全委員会委員と消費者団体との情報交換会（第6回）

1. 日時 : 平成26年7月25日(金) 10:00~12:00
2. 場所 : 食品安全委員会 委員長室
3. 出席者 : (敬称略)

(消費者団体)

主婦連合会 副会長	有田 芳子
(一社)全国消費者団体連絡会 政策スタッフ	小倉 寿子
財団法人消費科学センター 理事	犬伏 由利子
日本生活協同組合連合会 検査開発グループ GM	有江 麻美

(食品安全委員会委員)

熊谷委員長、佐藤委員、石井委員、上安平委員、村田委員

(食品安全委員会事務局)

姫田事務局長、山本総務課長、山本評価第二課長、
植木情報・勧告広報課長、野口リスクコミュニケーション官 他

4. 議 事

- (1) 開会挨拶
- (2) 話題提供「カフェインは危ない?~コーヒーを科学する~」
食品安全委員会 佐藤 洋 委員
- (3) 質疑応答、意見交換会
- (4) 閉会

5. 意見交換の主な発言 (○:消費者団体側発言 ●:委員及び事務局側発言)

- : コーヒーに関する調査では、コーヒーの産地や抽出法などはわかるのか。
また、膀胱の発がん性が上昇と言うのは、利尿作用と関わりがあるのか。
- : 疫学調査では、コーヒーの産地等詳しいことは分からない。また、膀胱については、カフェインは水に溶け、尿として排泄されるので、何らかの作用をしているかもしれないが、詳しい機序は分からない。
- : コーヒーは一日5杯程度が良いと主張する人もいるが、どうなのか。
- : コーヒーの淹れ方や1杯の量も異なるので、何杯なら良いというのはない。
動物実験で急性毒性を起こす量をそのままヒトに当てはめると、180杯となる。2年程前に出た論文では、5杯が良いとあった。その後に発表された論文では、異なる結果もあった。
- : コーヒーの中に色々の物質が入っているというのは面白かった。体に良いものと、悪いものが混ざっているということが、消費者の不安をあおるよう

に思う。体に良い、悪いで振り回される消費者の方にうまく伝える方法はないものだろうか。

- ：我々も同じことをいつも考えている。長年の食経験に基づいて食べるのが一番。サプリメントのように、濃縮してたくさん摂取するのは気を付けたほうが良い。
- ：長い間の食経験の積み重ねのない新しい食品は気を付けたほうが良い。
- ：アブラソコムツという魚は、ワックス成分が多く大量に食べると下痢をする。地元の人には経験から良く知っているのですが、少しだけ食べていたのだが、購入した会社が、そのことを知らない地域で給食に切り身として提供し、子供が下痢をしたため、毒魚として指定された。食べる対象を知り、食べ方を工夫する、伝統的な食べ方は大事。
- ：効能を期待して食べるのは食べ物に対して失礼ではないか。美味しく食べるのが一番。
- ：例えば、カフェイン依存症などの言葉があるが、どのくらいで依存症になり、どのような症状があるのか。また、薬との飲み合わせなどの影響はあるのか。
- ：いわゆる麻薬のような依存性は無いと思われる。あつたとしても強くはない。おそらく心理的な問題だと思われる。症状については、たくさん飲めば心拍数が上がるなど。薬との飲み合わせについては、カフェインとの相互作用と考えられるものがいくつかあつたと記憶している。（※薬とカフェインとの相互作用については、くすり適正使用協議会のHPに掲載されている。）
- ：表示について、元々麦茶にはカフェインが入っていないが、カフェインゼロとして売り出しているが、どう考えるか。
- ：麦茶の表示については、消費者から、「他の会社の麦茶にはカフェインゼロと書いているが、そちらの麦茶には書いていない。そちらの麦茶にはカフェインが含まれるのか。」という問い合わせがあるため、情報提供の観点から、ノンカフェイン表示を行うこととした。
- ：以前、あるマヨネーズの会社が「食品添加物は使っておりません」と表示をしたが、他の大手メーカーもみな使用していないため、抗議をされて表示を撤回したことがある。
- ：植物を一切食べない人がいるようだが、極端な食生活の集団の疫学調査は行ったことはあるのか。

●：例えば北極圏の先住民族は、野菜を全く食べないが大腸がんが多い、などの結果は出ていない。

●：彼らは食塩の摂取もとても少ないようだ。

●：栄養疫学は興味深い、あまり取組まれていない。また、疫学は個人には当てはまらない。

○：現在、原発の近くの魚はどういう状況なのか。

●：セシウムはカリウムと同じ動態を示す。淡水魚は、カリウムを取込み、蓄積することから、状況が長期化する恐れはある。海水魚は体内に蓄積しない。また、事故の前から原発から30 km 圏内は禁漁区域であった。

●：粒子状の物は海底に沈むが不溶性であるため、魚に吸収されず、たとえ吸収されても排泄されることから、セシウムであれば問題はない。

●：その他の核種は検出されていない。また、それらは重いので福島第一原発の敷地の外にはほとんど拡散しない。

○：ネオニコチノイドについて教えていただきたい。

●：わが国では、CCD（蜂群崩壊症候群）は発生していない。欧米では、蜂が巣箱から消えてしまうことが起こっているが、ダニ、病気、地磁気、農薬など様々な説がある。ネオニコチノイドは農薬であり、農薬は益虫と害虫を区別することはできないため、害虫とともに昆虫であるミツバチが死んでしまう。これまでの有機リン剤は、即効性があり、農薬が付着した時点でミツバチが死んでしまっていたが、ネオニコチノイドはゆっくり効果が出るため、巣箱に戻った後に死んでしまうので、目立ってしまう。アルファルファタコゾウムシが我が国に侵入する以前は、養蜂家と耕種農家につながりがあり、一斉防除を行う前に、養蜂家に伝えていたが、今はつながりがなくなったため、蜂がいることを知らずに農薬を散布してしまうなど、コミュニケーション不足が大きい。

欧州でネオニコチノイドの使用を制限しているのは、EFSA のリスク評価を踏まえてではなく、政治的な判断で EU が決定したもの。食品安全委員会では、科学に基づいて残留農薬について、食品健康影響評価を行った。

(以 上)